



信徒発見150周年と高山右近列福に向けて  
これだけのことは知つてほしい ⑩

# 福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題

## —世界代表司教会議（シノドス）—

福岡教区司祭 櫻井 尚明

### 世界代表司教会議 第3回臨時総会

去る10月5日から19日まで、バチカンで世界代表司教会議（シノドス）第3回臨時総会が開催されました。世界各国の司教協議会代表と教皇関係の司教たちをはじめ、神学者、修道者、信徒、カトリック教会以外のキリスト教の代表者など総勢253人が教皇のもとに集い、「福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題」というテーマで2週間の会期中、実り豊かな討議を繰り広げました。

今回のシノドスは、日本の一般紙にもたびたび報道されたことから分かるように、世界各国でその準備段階から非常に注目されていました。それはこれまでいろいろと議論されながらも結局は何も変わらなかつた身近な課題が、このシノドスで変わるのではないかという期待があつたからです。

2013年2月に教皇に就任して以来、フランス教皇は人々を祝福する前に、まず自分のために祈つてくださいと謙遜で誰も手を付けることができなかつたカトリック教会内の組織や習慣の改革に早々と取り組まれてきました。こういう教皇の姿に多くの人々がこれまでとは違う何か新しい息吹を感じ始めたのです。

その教皇が2013年7月、世界青年の日ブラジル大会からの帰途、飛行機の中で行われた同行記者たちとの懇談会で、「次のシノドスで、離婚者と再婚者の司牧配慮と聖体拝領の問題が含まれている結婚の司牧について、もっと踏み込んだ議論をしたい」と表明されたのです。そしてその年の10月、バチカンはシノドスの第3回臨時総会を「福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題」をテーマに、2014年10月

に開催することを発表しました。  
**今回のシノドスを生み出したイニシアティブ**

2012年9月に、元ミラノ大司教マルティニー枢機卿の遺言ともいえるインタビュー記事が公表され、話題になりました

（同枢機卿は同年8月に逝去、インタビューは死の数週間前に行われた）。その中で、今後のカトリック教会を力づけるものとして3つのことを挙げておられます。1つは回

心。2つ目は神のことば。そして3つ目に秘跡です。この秘跡について、同枢機卿は次のように言っています。「秘跡はしつけの道具ではなく、人々の生活の道程において、また日々体験する弱さにおいて彼らを助けられるものです。新しい力を必要としている人々に秘跡を授けています。私はすべての離婚した夫婦、再婚した夫婦、そして新たに歩みを始めた家庭のことについて考えています。彼らには、特別な守りが必要です。

教会は結婚の不解消性を擁護し続けています。それは結婚や家庭がうまくいっているときには恵みです。」カトリック教会の枢機卿としては大胆な教会批判とされました

が、多くの人々の心に刻まれた言葉でした。

2013年9月、今度はフランス教皇のインタビュー記事が全世界のカトリック系雑誌に掲載され話題となりました。その中で教皇は、「教会は野戦病院のようなものだ」と言つておられます。そこに運ばれてきた重傷者にコレステロール値や血糖値が高いとかは言つておられません。まず婚姻をした夫婦は、ゆるしの秘跡と聖体の秘密を受けられないことを明言しています。

しかし同時に、現在長い複雑なものになつてゐる結婚の無効宣言や絆の解消の手続きを簡素化すること、また再婚した夫婦について、最初の結婚の失敗について悔やみ、新しい結婚生活が安定し、新しい結婚生活で生まれた子どもがいて最早その生活を破棄できない状況にあり、秘跡の授受を心から望み信仰を子どもや他の人々に伝えたいという熱意を持ち、長期間教会による同伴を受け入れることを条件に彼らに回心への道を開く（秘跡を受けること）可能性を提案しています。この講演に対する反響は、福音宣教の観点から見た家庭の司牧について、もっと踏み込んだ議論をしたい」と表明されたのです。そしてその年の10月、バチカンはシノドスの第3回臨時総会を「福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題」をテーマに、2014年10月

に開催することを発表しました。

**2012年9月に、元ミラノ大司教マルティニー枢機卿の遺言ともいえるインタビュー記事が公表され、話題になりました**

（同枢機卿は同年8月に逝去、インタビューは死の数週間前に行われた）。その中で、今後のカトリック教会を力づけるものとして3つのことを挙げておられます。1つは回

心。2つ目は神のことば。そして3つ目に秘跡です。この秘跡について、同枢機卿は次のように言っています。「秘跡はしつけの道具ではなく、人々の生活の道程において、また日々体験する弱さにおいて彼らを助けられるものです。新しい力を必要としている人々に秘跡を授けています。私はすべての離婚した夫婦、再婚した夫婦、そして新たに歩みを始めた家庭のことについて考えています。彼らには、特別な守りが必要です。

教会は結婚の不解消性を擁護し続けています。それは結婚や家庭がうまくいっているときには恵みです。」カトリック教会の枢機卿としては

# 父の家に帰ろう

ー神のいつくしみを共に生き、伝えるためにー

Aはじめに

神の家族のうめきを祈りに換えて

1 高見大司教様、これほど光を祈り求めたことはありません<sup>(1)</sup>。

今わたしたちは、長崎教区の歴史の中で初めて開かれた教区シノドスを終えようとしています。信徒発見150周年を迎えるにあたり、教区長高見三明大司教の主宰のもと、選ばれたシノドス議員たちは長崎教区が抱える多くの課題と行く末を、祈りと議論のうちに模索してきました。この間、長崎教区の教会共同体が日々のミサや朝夕の祈りのうちにシノドスのために心を一つにして祈り続け、勇気づけてくださったことに心から感謝申し上げます。

シノドス議員たちは、長崎教区が現在抱えている多くの課題と複雑な問題のすべてに解答を与えようというつもりはありません。わたしたちはただ、幾多の苦難の中にあっても先祖たちによって育まれ、受け継がれてきたこの信仰を大切にし、神と教会への信頼と希望を教区のすべての仲間と共に分かち合いたいと思うのです。なぜならシノドス議員たちは、長崎の教会が一つの神の家族として、これまでに喜びと苦しみを分かち合いながら成長してきたことを知つておらず、今もまた、この神の家族のうめきを祈りに換えながら、希望への道と共に表明する務めを果たさなければならないからです。

提言の概要

2 「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい」<sup>(2)</sup>。立ち往生したアブラハムの背中を押す神のことばです。この提言を、長崎教区がいま立つておらず、ミサの与り方も知らず、おろおろし

B 記念と教区シノドス

3 「これをわたしの記念として行いなさい」<sup>(3)</sup>。このことばによつて、イエスは救いの神秘を聖体の秘跡に託しました。「記念」と訳されるギリシャ語の「アナムネーシス」

でいる光景を見るにつけ、あれほど信仰を伝えて生きることにこだわり続けてきた長崎の教会が、枯渇し、疲弊していくさまを、

長崎の教会共同体は悲しみと自責の念と深刻な危機感をもつて受け止めています。

わたしたちはこの会議で、教区シノドスが開かれる根本的な理由を確認することから始めました。そのために、長崎教区がここにきて信仰を伝えることができなくなつたことを素直に認め、また多くの兄弟姉妹がなぜ教会から遠ざかってしまったのか、

ゆるしを請いながらその原因を尋ねてみましたが。さまざまなもの理由で教会共同体から遠ざかつた、また遠ざけられた兄弟姉妹の境遇と苦悩を思えば、その責任の多くが帰られる今、教会共同体こそ、こうべを垂れ、

ゆるしを請わなければなりません。その思

いがない限り、これから提起されるすべての取り組みも、実を結ぶことのない虚しい目標でしかなくなるからです。

信徒発見150年を記念して行われる教区シノドスが、最初に提言するのは教区民

が開かれたこの回心です。そのうえで、手を取り合つたまま遠ざけられた兄弟姉妹の境遇と苦悩を思えば、その責任の多くが帰

られる今、教会共同体こそ、こうべを垂れ、

ゆるしを請わなければなりません。その思

いがない限り、これから提起されるすべての取り組みも、実を結ぶことのない虚しい目標でしかなくなるからです。

信徒発見150年を記念して行われる教区シノドスが、最初に提言するのは教区民

が開かれたこの回心です。そのうえで、手を取り合つたまま遠ざけられた兄弟姉妹の境遇と苦悩を思えば、その責任の多くが帰

られる今、教会共同体こそ、こうべを垂れ、

ゆるしを請わなければなりません。その思

いがない限り、これから提起されるすべての取り組みも、実を結ぶことのない虚しい目標でしかなくなるからです。

(記憶、想起、記念)は、生命力にあふれた内容を持つことばです。あの晩餐のことばと組織力や華やかな外的活動から生まれることを、シノドス議員たる生き方をし、そのためにはどんな苦しみを引き受けたのか、そのことをいつも目の前に置き、忘れないように心に刻みなさいと命じられたのです。教会は十字架の神祕を記念するたびに、その福音を確認し、自らを知り、時に適った軌道修正をしてきました。教会はまた、それぞの地方教会の信仰の歴史も、この地で起こされた神のみわざと命じられたのです。教会は十字架の神祕を記念するたびに、その福音を確認し、自らを知り、時に適った軌道修正をしてきました。教会はまた、それぞの地方教会の信仰の歴史も、この地で起こされた神のみわざと命じられたのです。教会は十字架の神祕を記念するたびに、その福音を確認し、自らを

知り、時に適った軌道修正をしてきました。教会はまた、それぞの地方教会の信仰の歴史も、この地で起こされた神のみわざと命じられたのです。教会は十字架の神祕を記念するたびに、その福音を確認し、自らを

知り、時に適った軌道修正をしてきました。教会はまた、それぞの地方教会の信仰の歴史も、この地で起こされた神のみわざと命じられたのです。教会は十字架の

また、つまづきは信者の生活苦と経済問題からも生まれます。競争原理による消費主義社会、その経済格差は深刻です。信者たちも同様の状況下にあります。それでも、教会は「おのの分に応じて教会維持費を負担すべし」<sup>(17)</sup>、信者の義務を強調します。年金暮らし、生活保護、失業、異宗婚家庭での教会費負担の苦惱……。それでも情け容赦のない一律負担の請求が経済的にも精神的にも重くのしかかってきます。その一方で、清貧で質素な宗教者の生活とは無縁の司祭たち。やせ細った貧しい羊の臭いの染み込んでいない牧者のもとには、もはや羊たちは近づいては来ません<sup>(18)</sup>。牧者が羊を養い、手負いの羊を癒やしてくれないからです。そうして、羊は牧者の声を知らず、聞いから羊はいなくなってしまいまし<sup>(19)</sup>。

## 10 第3に、世俗化の波を漂っている受洗者です。教会は「社会のただ中で生きています」<sup>(20)</sup>。

あれもいい、これもいい、絶対な

教会も久しく生きてきました。勝った人は

誰よりも努力した人昇りあがつた人は成

功した人。だから、勝ち組に入るためには、い

つの間にか教会や神のことよりも学習塾

やクラブ活動へと親は子どもに檄を飛ばし

ます。いつの頃からか、出向いて行く先が

世の中と同じ方向になつてしましました。

我が子の人生と幸せのために親が用意する

選択肢の中に、神や教会や祈りがなくなつ

てきたのです。そして、教会から親子の姿

が消えつつあります。

11 第4に、苦悩とうめきの中で呼び出されるのを待っている受洗者です。3組に1組の夫婦の絆が破たんする時代に入りました。カトリック信者の家庭も例外ではありません。長崎の教会には、「離婚した信者は破門」され、ゆるしにも聖体にも与れないと。いう旧来の掟が未だに染みついています<sup>(21)</sup>。

離婚した信者にとって、離婚の耐えがたい苦しみだけではなく、慰めと癒やしを求めるはずの教会の敷居も高くなっています。梯子をかけてくれる人がいなければ、もはや教会の門はくぐれません。また、離婚した単身者、民法上の再婚者、離婚した親と一緒に暮らす子どもたち、人知れず精神的・靈的な飢えと渴き、また経済的な困窮のなかで生きている兄弟姉妹がいます。「離婚した人々を助け、彼らが自分は教会から離れてしまつていると考えることがないようになります。なぜなら洗礼を受けました」とかわってください。なぜなら洗礼を受けました。

12 「このままではいけない」という心か

らの思いは、人を回心へと向かわせます。

イエスに対する約束と忠実から生まれてくるのは、回心と自己改革です<sup>(24)</sup>。つまり、「も

う一度やり直してみよう」という心からの

思いです。私たちの教会は、もうこれ以上、

問題をうやむやにしたり先送りしたりで

きないところまで来ていることを自覚しなければなりません。ですから、まず共同体

を挙げてキリストに向かつて、次のように

言うべきときが来ています。「主よ、わたし

たちは間違つていました。何度もあなたの

愛から逃げました。しかし、今もう一度あ

なたとの約束を更新するためにここにいま

す。主よ、あなたを必要とします。もう一

度あがない腕にわたしたちを受け入れ、

救い出してください」<sup>(25)</sup>。

13 キリストの福音に支えられた

共同体づくり

14 洗礼によってキリスト者の人生は始ま

り、聖体によつて養われ、ゆるしの恵みで再

生し、やがて癒やしの恵みの中で天の国に

帰つてきます。すべては共同体の祈りに

由つて支えられた営みです。キリストの共

体は、典礼の中で生まれ、育まれ、成長し

ていくものです。典礼は、教会のすべての

活動が目指す頂点であり、教会のいくつし

みに溢れた働きが湧き出る泉なのです<sup>(33)</sup>。

長崎の教会がキリストの共同体を再構築

していくものです。典礼は、教会のすべての

活動が目指す頂点であり、教会のいくつし

みに溢れた働きが湧き出る泉なのです<

しかし、すべての異宗婚が教会の内部崩壊の要因の一つになつてゐるわけではありません。むしろ、異宗婚が教会にとつて大きな恵みの場となることも知つています。その分岐点は、非受洗者との結婚を望むカトリック信者、およびその結婚の準備と挙式に立ち会う司牧者、そして異宗婚によつて誕生した家庭を取り巻く小教区共同体のかかわり方です。

長崎教区の現勢統計から、夫が信者の場合、のちに妻が受洗することはそれほど困難でないことがわかります。しかし、夫が非受洗者の場合、結婚後受洗することは少なく、また授かった子どもの受洗も困難な状況です。それは、「妻は夫の家に嫁ぎ、夫の家の宗教へと変わるもの」という、日本社会の暗黙の風潮が根底にあるからです。一方で、結婚後非受洗者の夫が受洗している場合があることも事実です。それは、妻の自ら誓った「信仰の保障」への自覚とともに、最初にかかわった司牧者の熱意と、またその後の小教区共同体の誠実で人間味あふれるかかわりが大きいことを、わたしたちは経験上知っています。

さらに、子どもがカトリックの保育所・幼稚園に通園する中で、子どもと一緒に祈る信者の父や母の姿、神に信頼したほのぼのとした姿を通して、理屈抜きに受洗へと向かう配偶者もいます。そのとき、子どもがまだ受洗していないなら、親と一緒に「家族洗礼」の大きな恵みの時を迎えることもあります。「家族洗礼」の恵みをいたぐ一家には、必ず、信者の妻か夫が家庭の中で確かな信仰の証人となり、自らの信仰を育み続けている姿があります。

救いの歴史をたどる「イエスの系図」<sup>(38)</sup>には、これまで神を知らない人を、ご自分の計画の中に組み込まれる神の働きが確認できます。組み込まれた人たちとは、神の民がそれまで出会つたことのないような新しいタイプの人たちです。異宗婚を通して洗礼の恵みに与った人は、教会という伝統を生きる古い幹に、新しい枝を接木するのに似ています。接木によって、いのちはまた生命力に溢れます。長崎の教会の歴史もそのことをよく知っています。長崎教区は、異宗婚を信仰の危機から、新たな息吹をもつた「家庭教会」へと変える使命を果たさなければなりません。

「オナジ」という信仰告白で始まった150年。前年のキリスト復活のとき、共同体として名乗りをあげた人たちが肌身離さず携えていたのは『どちりなきりしたん』<sup>(39)</sup>でした。それは、かぎりなく日本の文化や風習を考慮し、その上でキリスト者として福音を生きるすべをまとめた画期的な要理書でした。1600年にセルケイラ司教によって改定され、その後は書き写された手書きの要理書をもとに信仰は伝えられてきました。信徒発見直後の信者たちがまず行なったのは、自分たちが学んできた教えとパリ外國宣教会の司祭たちが携えて来た教えが、「オナジ」かどうかの確認作業でした。250年の司祭不在の時代をくぐり抜け、「オナジ」信仰を告白した長崎の教会の奇跡は、信仰教育によって生まれたといえます。長崎の教会が注いできたエネルギーの大部分は、この信仰教育に費やされてきたのです。これが長崎教区の誇りでもあるし、これからも課題であります。

たのそばであなたを照らし、力づけ、解放してくださいます」<sup>(41)</sup>という最初に刷り込まれた教えは、その後の人生がどんなに流轉しようと、一生消えることはありません。ただ年齢や発達段階や人生のさまざまな段階において、繰り返し確認され、深められていく必要があります。児童・子ども・学生・青年・壮年・高齢者など、独自の信仰教育が必要です。「宣教しなさい」という主の命令は、「信仰を成長させなさい」という呼びかけをうちに含んでいるからです。<sup>(42)</sup>

司祭・修道者の召命の促進

もはや教育ではありません。暗記を手段にした問答形式の『カトリック要理』が使田されなくなつた後、各小教区ではカリキュラムがないまま、現場カテキスターの常識に任せた状態が続いています。そのため小教区によつて教える内容が違ひ、親の勘定によって小教区を異動する子どもや親に混乱を招いています。そこで、教区の統一したカリキュラムを踏まえた子どものための要理書、また、大人のための要理書の編纂が早急に求められます。

学生、修道志願者は小教区からのささげの「司祭・修道者の召命は小教区が成長したるし」といった長崎の信者たちの率朴な信仰が、わが子を司祭・修道者の道へと送り出し、小教区共同体はそのためには物心両面で支援し、励まし続けてきました。しかし、2014年の今年、長崎カトリック神学院への入学者は一人になりました。あれほど司祭を待ちわびた教会が、にして6万2千人を擁する長崎の教会のささげものがたつた一人になった現実を、わが子たちほどのように受け上るべきでしょ

しています。神を大切にすることは、隣人を自分のことのように親身に思うこと。そこまでは、まだ理屈です。だから、キリスト教信者と名乗る人は、隣人を自分のことのとうに思う「14の所作」を心得て、その通りに生きることが神を大切にするあからだとしたのです<sup>(49)</sup>。放置された人に居場所を用意し、売られていく人を買い戻し、死にゆく人に寄り添い、さまざまくまる人に希望を差し出したのが日本の初期の教会でした。信徒発見後、配流の「旅」から帰還した信徒たち、牢屋の窄で言印をあかしした

司祭・修道者の召命の促進 21 信徒発見の年の12月8日、大浦の司祭館の屋根裏に「無原罪の御宿りの間」が記され、ここで253年ぶりに途絶えた神学生養成が始まります。第一期生は浦上の高木仙右衛門の二人の息子敬三郎と源太郎、そして上五島桐の下村与作の3人でした。ローマのペーパ様から司祭が派遣されるという約束を唯一の希望に250年間生き抜いてきた教会は、復活したその年に、教会になくてはならない司祭の養成を始めたのです。以来、長崎の教会は明治、大正、昭和の激動時代の中でも、多くの司祭修道者を育み、日本各地に派遣していくきました。長崎は、司祭・指導者の召命を育む肥沃な土壤として絶えず耕されてきました。

うか。自分で司祭を貢いきれないならば、アシア近隣のカトリック国から派遣してもらえば、何の支障もなく事足りるのでしょうか。司祭・修道者の召命減少への危機感のなさが、長崎の教会の衰退を物語っています。

司祭を待ちわびた長崎の教会から、司祭修道者の召命を絶やしてはなりません。召命は神からの賜物です。そのためにも、一度教区を挙げて司祭・修道者の召命のために祈りの輪を広げ、また、司祭たちは日々の生活をもつて、子どもや若者たちの召へへの憧れ、さらにはキリストとの出会いの橋渡しの役割を忠実に果たさなければなりません。一方で、神学生養成に従事する適正な司祭の選任と、その継続的な養成を怠つてはなりません。アジアの近隣諸国への白旗を揚げるのとおなじです。まだ早すぎます。<sup>(46)</sup>

## F よき隣人としての教会 —癒やしの福音を携えた共同体と私—

感よも、たゞうつた。心が震えて熱くなるのは、そつと福音が宿つたしです。人たちは同じように、痛みや悲しみに寄り添う人たちでした。心が震えて熱くなるのは、そつと福音が宿つたしです。

教皇フランシスコは、「私ははつきりして傷を癒す能力です。信ずる人たちの心を温める力です。身近さと親しさです。教会は戦闘後方の野戰病院だと思います。「中略 傷を癒す、傷を癒す……、低い下から始めべきなのです」<sup>(50)</sup>と、教会の役割について具体的に指摘しています。

社会の第一線から満身創痍で倒れ込んで来る人の癒やしの場でなければ、教会は何の意味もありません。長崎の教会は癒やしの福音を生きた時代の記憶を持つています。キリストを信じる民であることを自負するならば、もう一度理屈ではなく、血を通った肌身に感じる癒やしのための具体的な手立てを講じなければなりません。

癒やしを求める人たちの中には、まず、主日のミサに与り、神のことばと聖体に養われるいる信者たちがいます。しかし、彼らは疲れ切っています。もうこれ以上何かを要求しても応えるだけの気力もありません。日々の仕事と家庭生活からの心労を癒やすために本当は秘跡に与り、靈的な慰めを得たいのです。しかし、教会に来ても毎週のように会議と研修会とイベントの準備や後片付けで息つく暇がありません。だから、教会の役員をみんな嫌がり尻込し、巷の果ては輪番制を用いる始末です。かかわることを疎ましく思うほどに、癒やしのない共同体が広がっています。「会議やイベントをすれば、宣教に熱心な小教区」といふ考え方を変えない限り、長崎の教会は癒やしを差し出すことはできません。できまいかぎり会議や研修会やイベントを減らし静けさと落ち着きを取り戻し、癒やしの場

困難でないことがわかります。しかし、夫が非受洗者の場合、結婚後受洗することは少なく、また授かた子どもの受洗も困難な状況です。それは、「妻は夫の家に嫁ぎ、夫の家の宗教へと変わる」もの」という、日本社会の暗黙の風潮が根底にあるからです。一方で、結婚後非受洗者の夫が受洗している場合があることも事実です。それは、妻の自ら誓った「信仰の保障」への自覚とあふれるかかわりが大きいことを、わたしは経験上知っています。

さらに、子どもがカトリックの保育所・幼稚園に通園する中で、子どもと一緒に祈る信者の父や母の姿、神に信頼したほのぼのとした姿を通して、理屈抜きに受洗へと向かう配偶者もいます。そのとき、子どもがまだ受洗していないなら、親と一緒に「家族洗礼」の大きな恵みの時を迎えることもあります。「家族洗礼」の恵みをいただく一家には、必ず、信者の妻が夫が家庭の中で確かな信仰の証人となり、自らの信仰を育み続けていく姿があるのであります。

救いの歴史をたどる「イエスの系図」<sup>(38)</sup>には、これまで神を知らない人をご自分の計画の中に組み込まれる神の働きが確認できます。組み込まれた人たちは、神の民がそれまで出会つたことのないような新しいタイプの人たちです。異宗婚を通して洗礼の恵みに与つた人は、教会という伝統を生きる古い幹に、新しい枝を接木するのに似ています。接木によって、いのちはまた生命力に溢れます。長崎の教会の歴史もそのことをよく知っています。長崎教区は、異宗婚を信仰の危機から、新たな息吹をもつた「家庭教会」へと変える使命を果たさなければなりません。

国宣教会の司祭たちが携えて来た教えが「オナジ」かどうかの確認作業でした。50年の司祭不在の時代をくぐり抜け、「オナジ」信仰を告白した長崎の教会の奇跡は、信仰教育によつて生まれたといえます。長崎の教会が注いできたエネルギーの大部分はこの信仰教育に費やされてきたのです。これが長崎教区の誇りでもあるし、これからも課題であります。

「キリスト者の家庭は、信仰の最初の学校でなければなりません。そこでは洗礼の恵みの働きによつて神とイエス・キリストとともに親のことが教えられ、その愛を感じられるようになつていきます。またそこは、両親と子どもの行為の基準であるキリスト教の真理を少しづつ学んでいく場でもあります。信仰の教育は、すべての年齢を通じてきわめて重要なことです。この教育が効果をあげるために、初聖体の前にキリスト者としての生活の手ほどきをし、準備を与えていなければなりませんし、またその他の秘跡を自覚的かつ責任をもつてしばしば受けることによって、その教育を継続しなければなりません。そうすることによって、はじめて家庭は『家庭教会』となるでしょう。」<sup>(40)</sup>

長崎の教会には、上記の教皇の言葉を体現した時代がありました。しかし、全体の8割が異宗婚の家庭となり、また、世俗化の波にもまれるキリスト者の家庭に、いま理想的な状況を求めるることは極めて困難になつていることも事実です。それでも、洗礼の恵みを受け、キリスト者として成長するためには信仰教育は不可欠です。祈りのない人生、秘跡の恵みによる慰めのない人生、神の民の一員という自覚も、神の恵みに頼ることも知らない人生、その原因の一つは信仰教育の機会を与えられなかつたことですか。

「イエス・キリストはあなたを愛し、あなたを救うためにいのちをささげました。キリストはいまお生きておられ、日々あなた

19 信徒発見後、復活した教会で、パリ外国语宣教会の宣教師たちが最初に手掛けたのは神学生養成とカテキスタ養成でした。信仰の成長のためには、親だけではなく、特別な靈的同伴者が必要だからです。それがかつて「教え方さん」と呼ばれたカテキスターです。すべてのキリスト者も入信の秘跡を通してカテキスターですが、それとは区別された、聖靈の特別の賜物を通して<sup>(43)</sup>教会に与えられた固有の召命です。当初、信徒の中から選ばれて伝道学校で養成を受け、郷里の教会や巡回教会などへ派遣され、その務めを忠実に果たしていました。その後、教区立の修道会の誕生により、シスターたちが専任および他の仕事と兼務して行うようになります。しかし、修道会の召命の減少によって事業所の存続さえも困難になり、多忙を極めるシスターたちがもはやカテキスターを兼務できる状況ではなくなりました。周到な準備のできていない信仰教育は、ときとして子どもや若者たちの教会離れの要因の一つにもなりかねません。この必要不可欠な課題に正面から向き合い、早急に具体的な養成を始めなければ、長崎教区の再生は不透明なままになります。

現在もカテキスタ養成は行われていますが、単なる理論や知識の習得ではなく教育実習などをともなった実践的な養成が求められます。また、カテキスター自身の成長のためには生涯養成も不可欠です。小教区独自に信徒の中からカテキスターを養成確保することが理想ですが、地域によつては困難な場合もあります。そこで、将来はかつてあつたようにもう一度教区全体でカテキスターを養成派遣する制度をもうけ、雇用と生活保障のことも含め総合的に再考するときがきています。

司祭・修道者の召命の促進 21  
信徒発見の年の12月8日、大浦の司祭館の屋根裏に「無原罪の御宿りの間」が設けられ、ここで253年ぶりに途絶えた神学生養成が始まります。第一期生は浦上の高木仙右衛門の二人の息子敬三郎と源太郎、そして上五島桐の下村与作の3人でした。ローマのパープ様から司祭が派遣されると、いう約束を唯一の希望に250年間生き抜いてきた教会は、復活したその年に、教会になくてはならない司祭の養成を始めたのです。以来、長崎の教会は明治・大正・昭和の激動時代の中でも、多くの司祭修道者を育み、日本各地に派遣していきました。長崎は、司祭・指導者の召命を育む肥沃な土壤として絶えず耕されてきました。

うか。自分で司祭を賄いきれないならば、アジア近隣のカトリック国から派遣してもらえば何の支障もなく事足りるのでしょうか。司祭・修道者の召命減少への危機感のなさが、長崎の教会の衰退を物語つています。

司祭を待ちわびた長崎の教会から、司祭修道者の召命を絶やしてはなりません。召命は神からの賜物です。そのために、もともと一度教区を挙げて司祭・修道者の召命のために祈りの輪を広げ、また、司祭たちは日々の生活をもつて、子どもや若者たちの召命への憧れ、さらにはキリストとの出会いの橋渡しの役割を忠実に果たさなければなりません。一方で、神学生養成に従事する適正な司祭の選任と、その継続的な養成を怠つてはなりません。アジアの近隣諸国に司祭・神学生派遣を要請することは、召命への白旗を揚げるのとおなじです。まだ早すぎます。<sup>(46)</sup>

感いよも、たう台に命をなす。命々たう台に命をなす。命々たう台に命をなす。命々たう台に命をなす。  
は、そつと福音が宿つたしるしです。  
教皇フランシスコは、「私ははつきりし  
見ます。教会が今日最も必要とすることは  
傷を癒す能力です。信する人たちの心を治  
める力です。身近さと親しさです。教会は  
戦闘後方の野戰病院だと思います。「中略  
傷を癒す、傷を癒す……、低い下から始め  
べきなのです」<sup>(50)</sup>と、教会の役割について體  
的に指摘しています。  
社会の第一線から満身創痍で倒れ込んで  
来る人の癒やしの場でなければ、教会は何  
の意味もありません。長崎の教会は、癒や  
しの福音を生きた時代の記憶を持つてい  
ます。キリストを信じる民であること自負  
するならば、もう一度理屈ではなく、血の  
通った肌身に感じる癒やしのための具体的  
な手立てを講じなければなりません。  
癒やしを求める人たちの中には、まず、主  
日のミサに与り、神のことばと聖体に養わ  
れている信者たちがいます。しかし、彼ら  
は疲れ切っています。もうこれ以上何とか  
要求しても応えるだけの気力もありません  
。日々の仕事と家庭生活からの心労を癒  
やすために、本当は秘跡に与り、靈的な慰め  
を得たいのです。しかし、教会に來ても毎  
週のように、会議と研修会とイベントの準備  
や後片付けで息つく暇がありません。だ  
から、教会の役員をみんな嫌がり尻込し、業  
句の果ては輪番制を用いる始末です。かか  
わることを疎ましく思うほどに、癒やしの場  
ない共同体が広がっています。「会議やイベ  
ントをすれば、宣教に熱心な小教区」とい  
う考え方を変えない限り、長崎の教会は癒  
やしを差し出すことはできません。でき  
かぎり会議や研修会やイベントを減らし  
静けさと落ち着きを取り戻し、癒やしの場  
神との静かな語らいの場としての教会に回  
ることが不可欠です。

司祭・修道者の召命の促進 21 信徒発見の年の12月8日、大浦の司祭館の屋根裏に「無原罪の御宿りの間」が設けられ、ここで253年ぶりに途絶えた神学生養成が始まります。第一期生は浦上の高木仙右衛門の二人の息子敬三郎と源太郎、そして上五島桐の下村与作の3人でした。ローマのペーパ様から司祭が派遣されるという約束を唯一の希望に250年間生き抜いてきた教会は、復活したその年に、教会になくてはならない司祭の養成を始めたのです。以来、長崎の教会は明治、大正、昭和の激動時代の中でも、多くの司祭修道者を育み、日本各地に派遣していくきました。長崎は、司祭・指導者の召命を育む肥沃な土壤として絶えず耕されてきました。

うか。自分で司祭を貢いきれないならば、アシア近隣のカトリック国から派遣してもらえば、何の支障もなく事足りるのでしょうか。司祭・修道者の召命減少への危機感のなさが、長崎の教会の衰退を物語っています。

司祭を待ちわびた長崎の教会から、司祭修道者の召命を絶やしてはなりません。召命は神からの賜物です。そのためにも、一度教区を挙げて司祭・修道者の召命のために祈りの輪を広げ、また、司祭たちは日々の生活をもつて、子どもや若者たちの召へへの憧れ、さらにはキリストとの出会いの橋渡しの役割を忠実に果たさなければなりません。一方で、神学生養成に従事する適正な司祭の選任と、その継続的な養成を怠つてはなりません。アジアの近隣諸国への白旗を揚げるのとおなじです。まだ早すぎます。<sup>(46)</sup>

感よも、たゞうつた。心が震えて熱くなるのは、そつと福音が宿つたしです。人たちは同じように、痛みや悲しみに寄り添う人たちでした。心が震えて熱くなるのは、そつと福音が宿つたしです。

教皇フランシスコは、「私ははつきりして傷を癒す能力です。信ずる人たちの心を温める力です。身近さと親しさです。教会は戦闘後方の野戰病院だと思います。「中略 傷を癒す、傷を癒す……、低い下から始めべきなのです」<sup>(50)</sup>と、教会の役割について具体的に指摘しています。

社会の第一線から満身創痍で倒れ込んで来る人の癒やしの場でなければ、教会は何の意味もありません。長崎の教会は癒やしの福音を生きた時代の記憶を持つています。キリストを信じる民であることを自負するならば、もう一度理屈ではなく、血を通った肌身に感じる癒やしのための具体的な手立てを講じなければなりません。

癒やしを求める人たちの中には、まず、主日のミサに与り、神のことばと聖体に養われるいる信者たちがいます。しかし、彼らは疲れ切っています。もうこれ以上何かを要求しても応えるだけの気力もありません。日々の仕事と家庭生活からの心労を癒やすために本当は秘跡に与り、靈的な慰めを得たいのです。しかし、教会に来ても毎週のように会議と研修会とイベントの準備や後片付けで息つく暇がありません。だから、教会の役員をみんな嫌がり尻込し、巷の果ては輪番制を用いる始末です。かかわることを疎ましく思うほどに、癒やしのない共同体が広がっています。「会議やイベントをすれば、宣教に熱心な小教区」といふ考え方を変えない限り、長崎の教会は癒やしを差し出すことはできません。できまいかぎり会議や研修会やイベントを減らし静けさと落ち着きを取り戻し、癒やしの場

司祭・修道者の召命の促進 21  
信徒発見の年の12月8日、大浦の司祭館の屋根裏に「無原罪の御宿りの間」が設けられ、ここで253年ぶりに途絶えた神学生養成が始まります。第一期生は浦上の高木仙右衛門の二人の息子敬三郎と源太郎、そして上五島桐の下村与作の3人でした。ローマのパープ様から司祭が派遣されると、いう約束を唯一の希望に250年間生き抜いてきた教会は、復活したその年に、教会になくてはならない司祭の養成を始めたのです。以来、長崎の教会は明治・大正・昭和の激動時代の中でも、多くの司祭修道者を育み、日本各地に派遣していきました。長崎は、司祭・指導者の召命を育む肥沃な土壤として絶えず耕されてきました。

うか。自分で司祭を賄いきれないならば、アジア近隣のカトリック国から派遣してもらえば何の支障もなく事足りるのでしょうか。司祭・修道者の召命減少への危機感のなさが、長崎の教会の衰退を物語つています。

司祭を待ちわびた長崎の教会から、司祭修道者の召命を絶やしてはなりません。召命は神からの賜物です。そのために、もともと一度教区を挙げて司祭・修道者の召命のために祈りの輪を広げ、また、司祭たちは日々の生活をもつて、子どもや若者たちの召命への憧れ、さらにはキリストとの出会いの橋渡しの役割を忠実に果たさなければなりません。一方で、神学生養成に従事する適正な司祭の選任と、その継続的な養成を怠つてはなりません。アジアの近隣諸国に司祭・神学生派遣を要請することは、召命への白旗を揚げるのとおなじです。まだ早すぎます。<sup>(46)</sup>

感いよも、たう台に命をなす。命々たう台に命をなす。命々たう台に命をなす。  
は、そつと福音が宿つたしるしです。  
　教皇フランシスコは、「私ははつきりし  
見ます。教会が今日最も必要とすることは  
傷を癒す能力です。信する人たちの心を治  
める力です。身近さと親しさです。教会は  
戦闘後方の野戰病院だと思います。「中略  
傷を癒す、傷を癒す……、低い下から始め  
べきなのです」<sup>(50)</sup>と、教会の役割について體  
的に指摘しています。

　社会の第一線から満身創痍で倒れ込んで  
来る人の癒やしの場でなければ、教会は何  
の意味もありません。長崎の教会は、癒や  
しの福音を生きた時代の記憶を持つてい  
ます。キリストを信じる民であること自負  
するならば、もう一度理屈ではなく、血の  
通った肌身に感じる癒やしのための具体的  
な手立てを講じなければなりません。

　癒やしを求める人たちの中には、まず、主  
日のミサに与り、神のことばと聖体に養わ  
れている信者たちがいます。しかし、彼ら  
は疲れ切っています。もうこれ以上何とか  
要求しても応えるだけの気力もありません  
。日々の仕事と家庭生活からの心労を癒  
やすために、本当は秘跡に与り、靈的な慰め  
を得たいのです。しかし、教会に來ても毎  
週のように、会議と研修会とイベントの準備  
や後片付けで息つく暇がありません。だ  
から、教会の役員をみんな嫌がり尻込し、苦  
句の果ては輪番制を用いる始末です。かか  
わることを疎ましく思うほどに、癒やしの場  
ない共同体が広がっています。「会議やイベ  
ントをすれば、宣教に熱心な小教区」とい  
う考え方を変えない限り、長崎の教会は癒  
やしを差し出すことはできません。でき  
かぎり会議や研修会やイベントを減らし  
静けさと落ち着きを取り戻し、癒やしの場  
神との静かな語らいの場としての教会に回  
ることが不可欠です。

　現代社会が今一番求めているのは「癒や  
し」です。自死に追い込まれていく人、家  
庭の問題で悩んでいたり、仕事で頭痛い  
り、夫婦間で喧嘩ばかりしている人、子供  
の問題で困っている人など、多くの人が  
いるのが現状です。でも、教会はその多く  
の人たちと同じように、痛みや悲しみに寄  
添う人たちでした。心が震えて熱くなるの  
は、そつと福音が宿つたしるしです。

て切に呼びかけます。離婚した人々を助け、彼らが自分は教会から離れてしまつてゐるを考えることのないようかかわつてくれます。なぜなら洗礼を受けた者として彼らは教会生活にあずかりながら忍耐を持つて祈り続け、愛のわざや正義を求める共同体の努力に貢献したり、子どもをキリスト教の信仰のもとで教育して、回心の心と実践を身につけるように努めながら、日々神の恵みを求めていくよう励まされてしかるべきなのです。教会全体で彼らのために祈つて、勇気づけ、教会がいつくしみ深い母であることを示しながら信仰と希望のうちに彼らを支えていきましょう。<sup>(54)</sup>

神のまなざしの先には、不安で心細く生きる人たちがいます。彼らは離婚する前に何度もやり直そとします。そのとき、教会共同体は拠り所、相談相手となり得るでしょうか。母としての役割をもつ教会共同体は、破たんに向かう家庭の防波堤になれるように、具体的な手立てを用意する必要に迫られています。

一方、教会共同体はすでに離婚をきつかけに教会から遠ざかっている人たちと、父の家に帰るために同伴者にならなければなりません。その一番の責任は司牧者にあります。教会法は、「主任司祭は自分に委託された信者を知るように努めなければなりません。このために、家庭を訪問し、信者の不安、苦悩とくに悲しみを分かち合い、それらを主において慰め、そしてその中に落ち込んでいるときは、賢明にたしなめなければならぬ。」<sup>(55)</sup>特別の配慮をもつて、苦しんでいる人、および特別の困難にある者を世話しなければならない」と、その責任を明らかにしています。

さらに、民法上の離婚者にとって、教会法による前婚の絆の解消や無効宣言の決定は大きな恵みと癒やしであり、次の新たな人生への希望となります。そのために、主任司祭と教会共同体は、教会法による「癒やしの場」へも導かなければなりません。それが母なる教会のいくしみです。長崎の教会は、この受け皿となる法務担当者たちを絶えず確保し、養成し、そのつとめが滞ることのないようにしなければなりません。

しまう若者たちがいます。長崎の教会は、こうした兄弟姉妹に心のこもったかかわり方はできないのでしょうか。父の家で、そのいつくしみを共に生きようと望むならば、けつして置き去りにしてはいけない兄弟姉妹です。

さて、教会共同体が与えられた使命を果たすためには、もちろん経済的な裏打ちが必要です。しかし、それは信者による一律の負担の問題もさることながら、教区の財政運営の在り方そのものが今日問われています。教区組織の中核をなす教区本部事務局の運営が、信者の納得を得られるような遺産へと準備される中、さまざまな関連企業や団体が長崎教区とのかかわりを求めて押し寄せる今、カトリックセンターの宗教施設としての本来の在り方が問われています。教区組織のスリム化による人件費や維持管理費等の削減は、教区の経済問題や生活困窮者の支援を語るときの最優先課題です。

さらに、時代の要請に応えようと大風呂敷を広げ、企画はしたものの具体的な実りを見ることのない多くの組織の在り方にとも、今一度反省の目を向けなければなりません。その頻繁な会議のための経費も膨大になってしまいます。これほど多くの人を集め、度重なる会議をしなければ教会はもう何もできないのでしょうか。別の手立てを講じるときにつながります。貧しい小作農から絞り取る大地主のような長崎の教会の在り方を変えなければ、信者たちが抱く教会への不信感の解消も、頼りなく、心細く生きている信者たちへの癒やしも不可能です。つまり、経済的な理由によって、教会共同体から遠ざかった兄弟姉妹と共に「父の家」に帰るために、具体的な手立てを迅速に行う必要があります。経済的な救済処置は、「癒やしの福音」を携えている教会のあからかしでもあります。

い聖母に倣おう  
250年間、この  
ませんでした。「婦  
の子です。」見  
〔56〕キリストの  
れた聖母マリア  
に共にいてくだ  
母マリアは、聖靈  
つもいてくださ  
トの福音を差し  
をして長崎の教会  
は、先祖たちと思  
母マリアのみ名  
信仰をもって御  
たマリアは、「そ  
なわち、神のおき  
を守り通してい  
るからです。」<sup>57</sup>  
リア像の前から、  
出した人たちのよ  
教区のすべての  
リストを知らな  
リ亞は、手を取り  
を告げることが  
宗教法人法上の名称はこ  
れまでと同じ「宗教法人  
長崎純心聖母会」。  
命祈願ミサが行われた。  
高見三明大司教主司式、  
13人の司祭が共同司式を  
務めます。神父の多くは  
必ず参列する。この  
福音の喜びを多くの  
人に伝えたい。  
恵み思ひくことな  
い。

ク教会のカテキズム」<sup>853</sup>引用  
「アンアメリカ・カリブ司教  
ハレシーダ文書」（2007年  
月28日）参照  
1～6参照

ハウロ2世使徒的勸告『信  
使命』<sup>32</sup>引用  
年発布『教会法典』第23  
32条参照

ハウロ2世使徒的勸告『信  
使命』<sup>32</sup>引用  
46～52参照  
26参照

ハウロ2世使徒的勸告『信  
使命』<sup>32</sup>引用  
18引用  
2・8引用  
ノト16世回勅『神は愛』<sup>1</sup>引  
2・22引用  
ノト16世自発教令『信仰の  
仰年』開催の告示<sup>15</sup>参照  
27参照

び<sup>178</sup>参照  
び<sup>10</sup>参照  
び<sup>135</sup>～<sup>159</sup>参照

古ザリオの鎖<sup>1</sup>引用  
5引用

、司祭・修道者を志  
学生・志願生のため、  
新たな召命の恵みを  
て、皆で祈りをささ  
。教師を務めた長崎コ  
才院長の山脇守神  
、「召命」というのは  
みだといつも感じま  
と言葉を始め、自身  
驗を振り返り両親や  
の人の祈りがあつた  
について触れ、「自  
祈らなければならな  
ます。どうぞ粘り強  
頃から共に心を合わ  
お祈りください」と

年協	項照	徒	0	5	教庭	門用	かどづ園	エスス会立山修道院	サの終わりに、2人	した。
39	38	37	I	コリント7・						
マタイ1・1・	ヨハネ・パウロ2・	40	41	42	福音の喜び	43	44	45	46	マタイ1・1・
1591年、加津佐	同勧告160参照	41	42	43	Iコリント12・	12	28	ルカ2・29引用	ヨハネ・パウロ2・	1591年、加津佐
国字体で著され印	団謁見の際に(1)	28	28	28	外國宣教会年次報	社・1996年)-	28	松村菅和・女子カ	ヨハネ・パウロ2・	国字体で著され印
時、中町教会。同実	福音の喜び	164引	164引	164引	の司祭養成	1参考	15	外國宣教会年次報	ヨハネ・パウロ2・	時、中町教会。同実
追悼ミサ	●祈りの一 日	47	47	47	ルカ10・37引用	15	5	5	5	追悼ミサ
長崎市長・本島等	●祈りの日々	48	48	48	15	5	5	5	5	長崎市長・本島等
12月14日	12月12日	49	49	49	バ爾タ	15	5	5	5	12月14日
高見	●行季	50	50	50	報告書引用	15	5	5	5	高見
芳吉	●近故	Civiltà Cattoica o	Civiltà Cattoica o	Civiltà Cattoica o	報告書引用	15	5	5	5	芳吉
と	と	「教皇フランシス」	「教皇フランシス」	「教皇フランシス」	「教皇フランシス」	15	5	5	5	と
57	56	55	54	53	門脇佳吉訳『中央	15	5	5	5	57
56	55	54	54	52	月号)引用	15	5	5	5	56
『教会法』	『教会法』	51	51	51	ルカ10・37引用	15	5	5	5	55
ヨハネ19・26	ヨハネ19・26	マタイ25・40	マタイ25・40	マタイ25・40	マタイ25・40	15	5	5	5	54
福音の喜び	福音の喜び	6	6	6	6	15	5	5	5	53
285参	285参	17	17	17	9	15	5	5	5	52
		9	9	9	4	15	5	5	5	51
		4	4	4	参	15	5	5	5	50

14引用  
照  
のコレジオで完全な  
された要理書。  
アルゼンチン司教  
77年10月28日)  
用  
照  
ルメル会共訳『パリ  
吉1』(聖母の騎士  
貢引用  
使徒的勸告『現代  
サル・ガーヴ神父の  
ん』第7章、第12章  
013年9月19日  
へのインタビュー』  
論』(2014年1  
員会(実行委員長  
三明大司教)主催。  
ト項引用  
照  
カテキズム』177  
名様(福岡・篠丘)  
名様(諫早)  
ノ瀬ヒロ子様(浦上)  
—香典返し—  
カトリック神学院  
村佐代子様(奈留)  
ヨアキム江村薰様  
の方々からご寄付・ご  
を賜りました。お礼  
報告を申し上げます。

# 灯心を消すことなく

「私は天国へ登ります。お父さんもお母さんもさよなら」。この(牢屋の窄)拷問でいのちを落とした、十歳の少女の言葉です。一途に神のいのちを目指し、灯心を守るために差し出されたその小さな手のひらに、現代の教会は大いなる証しを見いだします。

(まるちれ研究会「ガリラヤへ」155頁)

## 牢屋の窄殉教祭



関東方面からの巡

う招いています

殉教祭には、牢屋の窄

で語った。

の迫害を生き延びた子孫

も遠くは茨城県より参加

しており、「参加できる

機会はもう最後かな

と思、元気なうちに思い

切って来ましたが、本当

に良かったです。先祖が

命懸けで伝えてくれた信

仰を誇りに、キリストの

証人として生きていきま

す」と感想と決意を笑顔

で語った。

説教を担当した島瀬文

武師(水ノ浦小教区主任)

は、殉教祭開催の準備に

携わった信徒たちへの感

謝を述べ、殉教者をしの

んで共に祈りをささげる

意義を語った。「参加する

だけの満足感で終わって

はいけません。殉教者た

ちの尊い生きさまは私

たちを現代の家庭や職

場、社会の証人となるよ

う」と思つている人は、

勇気を持つて神父様やシ

スターに相談してくださ

い。神様に呼ばれている

のはあなたです。

司祭やシスターになり

たいと思つて、神父様やシ

スターに相談してくださ

い。神様に呼ばれている

のはあなたです。

司祭やシスターになり



## ホームレス支援講演会

はあるか  
しは責任



いが、彼らは加害者ではなく、被害者であるとつくづく感じる」と、自身の思いを語った。